

Title	学位授与者氏名及び論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1982
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.22 (1982.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000022-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学事報告

学位授与者氏名および論文題目

修士 (昭和 56 年 3 月)

社会学修士

- 第 408 号 石田 米一 沖繩農村の変容過程とイノベーション受容構造
- 第 409 号 鹿又 伸夫 移動過程としての職業選択—行為論的接近と職業的社会化理論—
- 第 410 号 坂本 邦彦 東アフリカに於ける伝統的法体系の動態—バンツール・ナイロート系を中心—
- 第 411 号 竹林 史郎 超越論的問題の露呈 (新しい社会学への序論)
- 第 412 号 トドロビッチ・トミスラヴ 「日本人の日常生活におけるテレビの機能」
- 第 413 号 中島 洋子 幼児におけるコミュニケーションの発達
- 第 414 号 今中真理子 カール・マンハイムにおける「全体」概念と真理問題
- 第 415 号 植野 陽一 産業労働の心理学的研究に関する考察—労務管理技法の検討をとおして—
- 第 416 号 阿久津昌三 西アフリカにおける首長制社会の構造変動と政治行為の動態
- 第 417 号 熊田 俊郎 構造及び機能概念再考
- 第 418 号 奥出 直人 New Orleans, 1850-1880 — The world the White and the Black made (in English)

- 第 419 号 平野 学 筆跡とパーソナリティの関係についての実証的研究
- 第 420 号 加藤 千恵 『公平理論』研究
- 第 421 号 坂入 久也 マックス・ウェーバーにおける国民理念—政治社会学的研究—

文学修士

- 第 422 号 田中 毅 ハトの条件性弁別による線型序列学習
- 第 423 号 徳永 伸子 幼児における形の“半分”の理解とそれに及ぼす訓練効果

教育学修士

- 第 424 号 小倉 康仁 テキストの理解と記憶—スクリプト理論の観点から—
- 第 425 号 渡辺 弘 小林一茶の子供観
- 第 426 号 五十嵐敦子 モンテッソーリ・メソッドにおける「自由」の理論
- 第 427 号 糸日谷秀幸 「創造心理学序説」
- 第 428 号 小川 哲也 SCRIPT 理論による幼児の発達の研究
- 第 429 号 田島由美子 大学生の職業的同一性形成過程
- 第 430 号 赤尾 勝己 生涯教育の context における教育形態の吟味—学校教育との関わりを中心として—
- 第 431 号 安友 進 教育変革と社会変革
- 第 432 号 小川 春喜 日本近代教育における「幼学綱要」の役割—元田永孚の国教思想とその普及の実態—

博士 (甲)

文学博士

第 618 号 伊藤 正人 昭和56年3月30日

動物の時間弁別行動に関する基礎的研究

[論文審査担当者]

主査 文学部教授・社会学研究科委員

文学博士 小川 隆

副査 文学部教授・社会学研究科委員

文学博士 佐藤 方哉

同 文学部教授・文学博士 古崎 敬

[論文審査の要旨]

時間弁別に関する研究は実験的行動分析の手法によって近年、盛んに行われるようになったが、この手法については多くの問題を残している。本論文は実験的行動分析が開発した手法と成果を考察し、特にその手法についての問題点を比較研究したものである。